

原著論文

神奈川県立生命の星・地球博物館に展示されていた
ウシマンボウの剥製標本A Mounted Specimen of *Mola alexandrini* (Ranzani, 1839)
Exhibited in the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History澤井悦郎¹⁾・瀬能 宏²⁾・竹嶋徹夫³⁾Etsuro SAWAI¹⁾, Hiroshi SENOU²⁾ & Tetsuo TAKESHIMA³⁾

Abstract. The world's heaviest bony fish, *Mola alexandrini* (Tetraodontiformes: Molidae) has a long history of being confused with *Mola mola*. It was recently discovered that a specimen of *Mola alexandrini* was mixed in with specimens of the genus *Mola* stored in the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History. This specimen was caught by set net off Manazuru, Kanagawa Prefecture (35°10'N, 139°08'E), Japan, on 28 October 1977. Via the Enoshima Aquarium (before refurbishment), it is now exhibited as a mounted specimen in the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History. This specimen represents the fifth whole body specimen of this species from Japan and an additional record from Kanagawa Prefecture. Factors that made it difficult to identify this specimen were suggested as “deformation of the mounting process” and “morphological abnormality of clavus”.

Key words: abnormal form, additional record, bump-head sunfish, Molidae, morphology

はじめに

ウシマンボウ *Mola alexandrini* は世界中の温帯・熱帯を中心とした広い海域に分布する大型のフグ目魚類である (Sawai *et al.*, 2018a)。特に、1996年8月16日に千葉県鴨川市沖で漁獲された体重 2300 kg (全長 272 cm) の本種の個

体は世界最重量硬骨魚個体として知られ (澤井, 2017; Sawai *et al.*, 2018a)、2018年9月14日にはギネス世界記録にも認定された (Guinness World Records, 2018b; 七井智寿私信)。

本種は日本近海では少なくとも1969年から記録があり (澤井・山野上, 2016b)、太平洋側は北海道から沖縄にかけて、日本海側は富山県以南で散発的に出現が確認されている (例えば、澤井・山野上, 2016a; Sawai *et al.*, 2018a)。毎年、日本各地で本種の漁獲はあるものの、漁獲自体が稀であること、雌雄ともに全長 120 cm 以上の大きな体サイズしか確認されていないことなどから、標本として保存することが難しく、全身標本を保管する国内の博物館関連施設は非常に少ない (澤井ほか, 2015; Sawai *et al.*, 2018b)。

また、本種は世界中で同属のマンボウ *Mola mola* やカクレマンボウ *Mola tecta* と混同・誤同定されてきた隠蔽種としての長い歴史をもち (例えば、Sawai *et al.*, 2017, 2018a; Nyegaard *et al.*,

¹⁾ マンボウなんでも博物館
〒424-0901 静岡県静岡市清水区三保 13-6
プレジールかずいC棟 102号室
Ocean Sunfishes Information Storage Museum,
C-102 Plaisir Kazui APT, 13-6 Miho, Shimizu-ku,
Shizuoka, Shizuoka 424-0901, Japan
澤井悦郎 : sawaetsu2000@yahoo.co.jp

²⁾ 神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History,
499 Iryuda, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan

³⁾ 新江ノ島水族館
〒251-0035 神奈川県藤沢市片瀬海岸 2-19-1
Enoshima Aquarium,
2-19-1 Katasekaigan, Fujisawa, Kanagawa 251-0035, Japan

2018)、本種の基礎的な生物学的知見が不足している大きな要因となっている。同様に、2010年にウシマンボウの標準和名が提唱されるまでは、日本近海に出現するマンボウ属はマンボウ1種と長らく考えられてきたため、国内の博物館関連施設に展示・保管されているマンボウ属の標本においても、本種の混同が確認されている(澤井ほか, 2015; 澤井, 2017)。この度、神奈川県立生命の星・地球博物館に展示・保管されているマンボウ属魚類の標本の中にもウシマンボウが1標本混在していたことが新たに判明した。筆者らの知る限りでは、国内で展示・保管されているウシマンボウの全身標本は現状4個体であり(澤井ほか, 2015; Sawai *et al.*, 2018b)、また神奈川県における本種の記録は過去に1例しか確認されていない(澤井・山野上, 2016a)。本研究で扱ったウシマンボウ1標本は国内で5個体目の全身標本、神奈川県2例目となる貴重な記録と考えられたため、ここに詳細を報告する。

材料と方法

本研究に使用した1標本は、1977年10月28日に神奈川県足柄下郡真鶴町岩の地先(35°10'N, 139°08'E)に設置された定置網によって漁獲され、同年11月5-6日の「小田原さかなまつり」に氷を敷き詰められた状態で展示された後、11月7日に小田原魚市場から江の島水族館(現・新江ノ島水族館)に運ばれた。同水族館で解剖やホルマリン固定などが行われ、標本は11月9日から透明のビニールシートで覆われたホルマリン水槽の上に深さ10 cmほどの水道水を入れた状態で15年間、館内展示された(図1A)。その後の本標本の詳細な経歴は記録が失われているため不明であるが、1992年秋頃に江の島水族館から神奈川県立博物館(現・神奈川県立歴史博物館)に寄贈、神奈川県立博物館で剥製化され、1995年3月20日に開館した当時から現在まで神奈川県立生命の星・地球博物館で剥製標本(標本番号: KPM-NI 31858)として展示されている(図1B)。

本標本は生鮮時に第三著者を含めた江の島水族館職員によって全長(吻端から舵鰭先端までの直線距離)と全高(背鰭先端から臀鰭先端までの直線距離)が計測された: 全長202 cm, 全高294 cm。生鮮時の体重は300-350 kgと伝えられているが(例えば、1977年11月8日付け神奈川新聞13ページ目; 江ノ島水族館, 1979)、実際には計量されていない推定体重である。本標本の種同定はSawai *et al.* (2018a)に従い、液浸標本時の写真と剥製化後の標本を用いて調査し(図1)、同

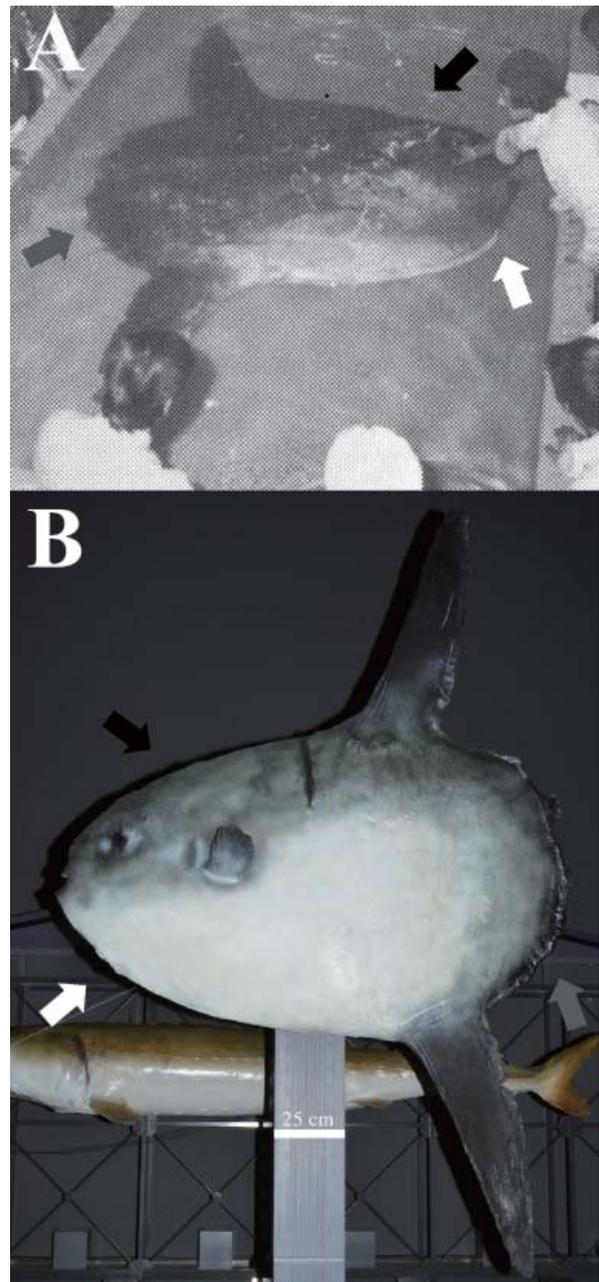


Fig. 1. A mounted specimen of *Mola alexandrini* (KPM-NI 31858) exhibited in the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History. A: formalin-fixed specimen [modified figure from Enoshima Aquarium (1979)]. B: mounted specimen (current state). Arrows indicate taxonomic key characters (black arrow: the presence or absence of a head bump, white arrow: the presence or absence of a chin bump, gray arrow: the shape of the clavus margin) by Sawai *et al.* (2018a). Scale bar: 25 cm.

図1. 神奈川県立生命の星・地球博物館に展示されているウシマンボウの剥製標本(標本番号: KPM-NI 31858)。A: 液浸標本時[江ノ島水族館(1979)の図を改変]。B: 剥製後。矢印は分類形質を示す(黒矢印: 頭部の隆起の有無, 白矢印: 下顎下の隆起の有無, 灰矢印: 舵鰭縁辺部の形状)。スケールバー: 25 cm。

属内で比較した（表1）。本標本は高い位置に支柱で固定されて展示されており、直接標本を調査することが困難であるため、各鰭の鰭条数（軟条数）は左体側を脚立に登ってデジタルカメラで撮影し画像上で計数した。同様に、鱗の形状もデジタルカメラのズーム機能を使い、胸鰭より後ろの腹側下半部を複数ヵ所撮影し画像上で観察した。また、剥製化による標本の変形を評価するために、ImageJ (<https://imagej.nih.gov/ij/>) を使い、デジタルカメラで撮影した画像上で剥製後の全長と全高を計測した〔本標本を支えている支柱の幅（25 cm）を基準とした〕。

出現水温の参考として、漁獲日に近い表面水温は、海上保安庁海洋情報部（1955–2018）が公表した水温水平分布図（観測期間 1977 年 10 月 15 日–11 月 1 日）から漁獲地周辺の表面水温を読み取った。

結果

本標本の各鰭条数は胸鰭 11 軟条、背鰭 18 軟条、臀鰭 17 軟条、舵鰭 18 軟条であった（図 2A; 表 1）。剥製後の全長は 177.2 cm、全高は 267.7 cm で、両者とも生鮮時より 25 cm 前後縮小していた。生鮮時の全高/全長比は 145.5%、剥製後は 151.1% であった（表 1）。

上記に加え、本研究で調査したマンボウ属の分類形質（鱗の形状、下顎下の隆起の有無、頭部の隆起の有無、舵鰭上の smooth band back-fold の有無、舵鰭縁辺部の形状、舵鰭縁辺部の骨板数）は表 1 にまとめた。鱗は真上から線状に見える長方形の鱗を有していた（図 2B）。下顎下の隆起は液浸標本時の写真（図 1A 白矢印）では確認されたが、剥製後の標本（図 1B 白矢印）では確認されなかった。頭部の隆起は液浸標本時の写真（図 1A 黒矢印）では明瞭な隆起は確認されず、剥製後の標本（図 1B 黒矢印）でも確認されなかった。舵鰭上の smooth band back-fold (Nyegaard *et al.*, 2018; Sawai *et al.*, 2018a) は液浸標本時、剥製後ともに確認されなかった（図 1, 2A）。舵鰭縁辺部の形状は、液浸標本時、剥製後ともに波型が確認された（図 1 灰色矢印, 2A）。舵鰭縁辺部の骨板数は、画像上での計数が困難であった。

本標本の漁獲日に近い表面水温は 21 °C–22 °C であった。

考察

日本近海に出現するマンボウ科魚類は 4 種である：マンボウ、ウシマンボウ、ヤリマンボ

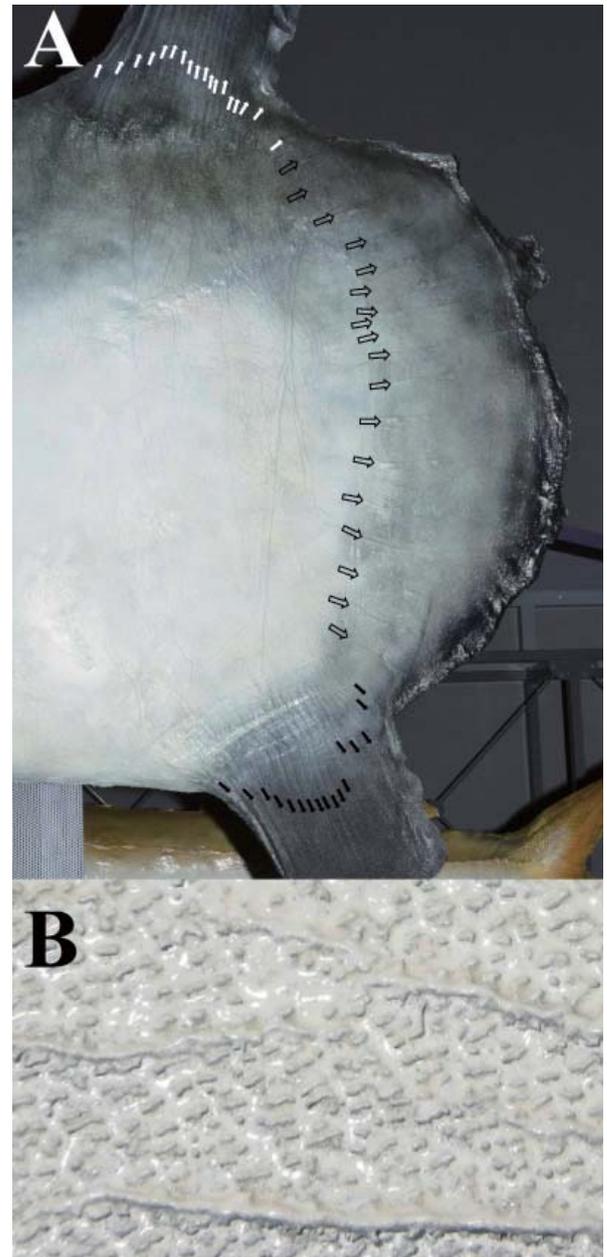


Fig. 2. Morphological characters of a mounted specimen of *Mola alexandrini* (KPM-NI 31858). A: posterior part of body. B: body scales on the abdomen side behind the pectoral fin. Arrows indicate each fin rays (white arrow: dorsal-fin rays, open arrow: clavus-fin rays, black arrow: anal-fin rays).

図 2. ウシマンボウの剥製標本（標本番号：KPM-NI 31858）の形態形質。A: 体の後部。B: 胸鰭より後ろ腹部側の体の鱗。矢印は各鰭の軟条を示す（白矢印：背鰭軟条、白抜き矢印：舵鰭軟条、黒矢印：臀鰭軟条）。

ウ *Masturus lanceolatus*、クサビフグ *Ranzania laevis* (松浦, 2017; 澤井, 2017)。本研究で扱った標本（KPM-NI 31858）がマンボウ科のどの種と一致するのかを再考すると、クサビフグは細長い体形で胸鰭の先端が尖るなど（松浦, 2017; 澤井, 2017）、本標本と著しく異なる形態を持つことから一致しない。ヤリマンボウは舵鰭中央よりやや

Table 1. Morphological characters of *Mola*

表 1. マンボウ属の形態的特徴

	Present study	Sawai <i>et al.</i> (2018a)*		
	KPM-NI 31858	<i>Mola alexandrini</i>	<i>Mola mola</i>	<i>Mola tecta</i>
Total length (cm)	202 [177.2]	29.3–325.0, <i>n</i> = 20	28.2–277.0, <i>n</i> = 34	49.9–242.0, <i>n</i> = 25
Measurement (% TL)				
Total body depth (means)	145.5 [151.1]	112.9–155.8 (129.0), <i>n</i> = 5, >181.3 cm TL	109.4–122.8 (117.0), <i>n</i> = 8, >193.7 cm TL	ca. 103–114 (109)**, <i>n</i> = 2, >212.0 cm TL
Counts (means)				
Pectoral-fin rays	[11]	11–12 (11.7), <i>n</i> = 14	10–13 (11.8), <i>n</i> = 20	11–13 (11.9), <i>n</i> = 11
Dorsal-fin rays	[18]	16–19 (17.6), <i>n</i> = 10	18–19 (18.4), <i>n</i> = 8	17–19 (18.1), <i>n</i> = 8
Anal-fin rays	[17]	15–17 (16.5), <i>n</i> = 10	17–18 (17.4), <i>n</i> = 8	16–18 (17.1), <i>n</i> = 8
Clavus-fin rays	[18]	14–24 (17.3), <i>n</i> = 12	11–14 (12.3), <i>n</i> = 15	15–17 (15.9), <i>n</i> = 10
Dorsal+clavus+anal-fin rays	[53]	48–57 (52.0), <i>n</i> = 10	47–50 (48.5), <i>n</i> = 8	50–52 (51.3), <i>n</i> = 7
Ossicles on clavus	–	8–15 (11.8), <i>n</i> = 10, >60 cm TL	8–9 (8.6), <i>n</i> = 14, >60 cm TL	5–7 (5.8), <i>n</i> = 8, >65 cm TL
Morphological observations				
Shape of clavus edge	Wavy [Wavy]***	Round, <i>n</i> = 20	Wavy, <i>n</i> = 14, >126.4 cm TL	Rounded with an indent, <i>n</i> = 24
Smooth band back-fold	Absent [Absent]	Absent, <i>n</i> = 19	Absent, <i>n</i> = 34	Present, <i>n</i> = 24
Head bump	Absent? [Absent]	Present, <i>n</i> = 12, >162.5 cm TL	Absent, <i>n</i> = 34	Absent, <i>n</i> = 25
Shape of body scale	[Rectangular]	Rectangular, <i>n</i> = 11, >162.5 cm TL	Conical with branching of tip, <i>n</i> = 14, >109.9 cm TL	Conical without branching of tip, <i>n</i> = 17
Chin bump	Present [Absent]	Present, <i>n</i> = 13, >135.0 cm TL	Absent, <i>n</i> = 34	Absent, <i>n</i> = 25

Square brackets are data from the mounted specimen.

*Data of typical specimens of each species from Sawai *et al.* (2018a), but total body depth / total length ratios of *Mola tecta* got from Nyegaard *et al.* (2018).

**The approximate data was read from the figure 7A of Nyegaard *et al.* (2018).

***morphological abnormality.

角括弧は剥製標本のデータ。

*Sawai *et al.* (2018a) から各種の典型的な標本のデータを得たが、カクレマンボウの全高 / 全長比は Nyegaard *et al.* (2018) から得た。

**Nyegaard *et al.* (2018) の図 7A からおよそのデータを読み取った。

***形態異常。

背側の縁辺部に突出部を持ち (松浦, 2017; 澤井, 2017)、舵鰭突出部は本標本にもあるように見える (図 2A)。しかし、ヤリマンボウは舵鰭が全体的に波打つことはなく、舵鰭軟条数 (19–23 個) は本標本より多く、鱗の形状も円錐形であることから本標本と一致しない (Katayama & Matsuura, 2016; 松浦, 2017)。加えて、マンボウ科にはあと 1 種、カクレマンボウもいるが、本種は北半球で明確な分布が確認されていないこと (Nyegaard *et al.*, 2018; Sawai *et al.*, 2018a)、smooth band back-fold を有することなどから本標本とは一致しない (図 2A; 表 1)。

本標本はこれまでマンボウと同定されてきた (1977 年 11 月 8 日付け神奈川県新聞 13 ページ目; 江ノ島水族館, 1979)。しかし、本研究で再調査したところ、舵鰭 18 軟条 (背・舵・臀鰭合計 53 軟条)、真上から線状に見える長方形の鱗、下顎下の隆起、smooth band back-fold の無い舵鰭の特徴を有することからウシマンボウと再同定された (図 1–2; 表 1)。また、本標本の生鮮時の全高 / 全長比 (145.5 %) も同サイズのマンボウやカクレマンボウより高く (Nyegaard *et al.*, 2018; Sawai *et al.*, 2018a, b; 表 1)、本標本がウシマンボウと同定できることを支持した。

これまで本標本の同定を困難にしていた要因として、「剥製化による変形」と「舵鰭の形態異常」の 2 点が挙げられる。まず、本標本の剥製後は生鮮時より全長と全高が 25 cm 前後縮小し、剥製後の全高 / 全長比も生鮮時より 5.6 % 高くなっていたことから、標本全体が縮小・変形しているこ

とが考えられた (表 1)。液浸標本時に確認されたウシマンボウ特有の形質である下顎下の隆起が剥製後に確認できなかったことは、剥製化の過程による変形で失われたものと推察される (図 1 白矢印)。同様に、ウシマンボウ特有の形質である頭部の隆起も (あまり発達しなかった個体であるためか液浸標本時の写真でも頭部の隆起は顕著ではないが)、剥製化による変形で失われた可能性がある (図 1 黒矢印)。

次に、本標本の舵鰭縁辺部の形状は波型があるように見えるが (図 1 灰色矢印; 図 2A)、1977 年 11 月 8 日付け神奈川県新聞 13 ページ目にある液浸標本になる前の写真を確認すると、奇形もしくは何らかの捕食生物に齧られたような形態異常と考えられた。形態異常の舵鰭を持つウシマンボウはいくらか確認されており、例えば、澤井ほか (2009) の個体 (この論文での本種の表記は *Mola* sp. A) は舵鰭が丸ごと欠損し、澤井・山野上 (2016a) の個体は舵鰭の一部にわずかな波型があり、Guinness World Records (2018a) の個体 (この本ではマンボウと誤同定) は舵鰭の腹側が大きく欠損して本標本より不自然な波型となっている。典型的なウシマンボウの舵鰭縁辺部は波型のない半円形であり、舵鰭縁辺部に波型を持つのはマンボウ特有の形質であるが、マンボウの舵鰭の波型は山型であり (Sawai *et al.*, 2018a)、本標本のように波型は部分的にも谷型 (図 2A) にはならない。マンボウ属の骨板は舵鰭縁辺部に形成されるため (澤井ほか, 2015)、本標本の骨板の計数が困難であった主要因は舵鰭の形態異常によ

る欠損と考えられ、また剥製化の際に塗料などでコーティングされたことも計数を困難にした要因の一つと考えられた。

日本近海に出現するウシマンボウは全長120 cm以上の大きな体サイズであるため、国内で保管されている全身標本は、剥製が3標本（ミュージアムパーク茨城県自然博物館、アクアワールド茨城県大洗水族館、北九州市立自然史・歴史博物館）、液浸が1標本（萩博物館）と非常に少なく、本標本は国内で5個体目の本種の全身標本となる（澤井ほか, 2015; Sawai *et al.*, 2018b）。先行研究（澤井ほか, 2015）や本研究で、博物館関連施設に保管されているマンボウとされていた標本の中にウシマンボウの標本が混同されていた結果は、他館でも同様の種の混同が起きている可能性を示唆する。隠蔽種の発見など分類学的研究の進展と共に、博物館などで保管されている標本も定期的に種同定の見直しを行うことが必要である。

これまでに文章化された神奈川県におけるウシマンボウの記録は1例しかないため（澤井・山野上, 2016a）、本標本は神奈川県2例目の記録となる。本標本は県内1例目として報告された2015年12月21日漁獲個体の漁獲場所（神奈川県小田原市米神）や出現水温（20.3 °C）と近く（澤井・山野上, 2016a）、神奈川県内における本種の出現状況は38年間あまり変わっていない可能性を示唆する。日本近海における本種の漁獲は稀であるが、おそらく数個体は毎年県内でもマンボウと混同されて漁獲されているものと推察され、本種の回遊生態を明らかにするためにも、継続して出現記録を集積していくことが重要である。

本標本は江の島水族館で液浸標本として展示されていた頃に、来館者がビニールシートを触ろうとして、ホルマリン水槽の上に張った水道水に手を入れて濡れたという話が残され（内田, 1996）、国内最大のマンボウ属の液浸標本だったこともあり、来館者に衝撃を与えたエピソードがインターネット上でも散見される。しかし、その後、剥製標本として神奈川県立生命の星・地球博物館で展示されていることは一般的にはほとんど知られていない。水族館は博物館の1種であり、娯楽施設の役割を担うと同時に教育施設としての役割も果たす必要がある（鈴木・西, 2010）。本標本の剥製化される前の資料は、改装後の新江ノ島水族館でもほとんど残されていなかったことから、本論文で可能な限り標本の由来や経歴を追跡してまとめたことは、学術的にも教育的にも価値が高いものと考えられる。本標本は江の島水族館時代から一般の人々の関心が高いため、学術的に

貴重な標本としてだけでなく、教育的にも有用な標本として、新江ノ島水族館、神奈川県立生命の星・地球博物館双方で今後活用されることが期待される。

謝 辞

新江ノ島水族館の皆さまには、本研究に必要な資料収集の協力をして頂いた。共同通信社新潟支局の七井智寿氏にはギネス世界記録に問い合わせ、ウシマンボウが世界最重量硬骨魚としてギネス世界記録に認定された日を特定して頂いた。多くのTwitterユーザーには、液浸標本時の写真探しに協力して頂いた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 江ノ島水族館, 1979. 江の島水族館 25年のあゆみ. 183pp. 江ノ島水族館, 藤沢.
- Guinness World Records, 2018a. Heaviest bony fish. In Guinness World Records 2019, p. 63. Guinness World Records, London.
- Guinness World Records, 2018b. Heaviest bony fish. Online. Available from internet: <http://www.guinnessworldrecords.com/world-records/heaviest-bony-fish> (accessed on 2018-10-26).
- 海上保安庁海洋情報部, 1955–2018. 海洋速報（昭和52年第21号）. 1977年11月4日発行. Online. Available from internet: <http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/1977/197721a.png> (accessed on 2018-10-26).
- Katayama, E. & K. Matsuura, 2016. Fine structures of scales of ocean sunfishes (Actinopterygii, Tetraodontiformes, Molidae): another morphological character supporting phylogenetic relationships of the molid genera. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A*, **42**(2): 95–98.
- 松浦啓一, 2017. 日本産フグ類図鑑. 127pp. 東海大学出版部, 神奈川.
- Nyegaard, M., E. Sawai, N. Gemmell, J. Gillum, N. R. Loneragan, Y. Yamanoue & A. L. Stewart, 2018. Hiding in broad daylight: molecular and morphological data reveal a new ocean sunfish species (Tetraodontiformes: Molidae) that has eluded recognition. *Zoological Journal of the Linnean Society*, **182**(3): 631–658.
- 澤井悦郎, 2017. マンボウのひみつ. 208pp. 岩波書店, 東京.
- 澤井悦郎・山野上祐介. 2016a. 神奈川県小田原沖にて冬期に漁獲されたウシマンボウ. *魚類学雑誌*, **63**(1): 54–56.
- 澤井悦郎・山野上祐介, 2016b. マンボウとウシマンボウと日本におけるマンボウ研究. *海洋と生物*, **38**(4): 451–457.
- Sawai, E., Y. Yamanoue, L. Jawad, J. Al-Mamry & Sakai Y., 2017. Molecular and morphological identification of *Mola* sunfish specimens (Actinopterygii: Tetraodontiformes:

- Molidae) from the Indian Ocean. *Species Diversity*, **22**(1): 99–104.
- 澤井悦郎・山野上祐介・望月利彦・坂井陽一, 2015. 日本国内の博物館関連施設に保管されているマンボウ属の大型剥製標本に関する形態学的知見について. 茨城県自然博物館研究報告 (18): 65–70.
- Sawai, E., Y. Yamanoue, M. Nyegaard & Y. Sakai, 2018a. Redescription of the bump-head sunfish *Mola alexandrini* (Ranzani 1839), senior synonym of *Mola ramsayi* (Giglioli 1883), with designation of a neotype for *Mola mola* (Linnaeus 1758) (Tetraodontiformes: Molidae). *Ichthyological Research*, **65**(1): 142–160.
- 澤井悦郎・山野上祐介・坂井陽一・橋本博明, 2009. 日本近海で採集されたマンボウ属 (*Mola* spp. A and B) の形態異常個体. 生物圏科学: 広島大学大学院生物圏科学研究科紀要, **48**: 9–17.
- Sawai, E., Y. Yamanoue, T. Sonoyama, K. Ogimoto & M. Nyegaard, 2018b. A new record of the bump-head sunfish *Mola alexandrini* (Tetraodontiformes: Molidae) from Yamaguchi Prefecture, western Honshu, Japan. *Biogeography*, **20**: 51–54.
- 鈴木克美・西源二郎, 2010. 新版 水族館学—水族館の発展に期待をこめて. 517pp. 東海大学出版会, 神奈川.
- 内田春菊, 1996. 水族館行こ ミーンズ I LOVE YOU. 213pp. 扶桑社, 東京.

摘 要

澤井悦郎・瀬能 宏・竹嶋徹夫, 2019. 神奈川県立生命の星・地球博物館に展示されていたウシマンボウの剥製標本. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (48): 37–42. [Sawai, E., H. Senou & T. Takeshima, 2019. A Mounted Specimen of *Mola alexandrini* (Ranzani, 1839) Exhibited in the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History. *Bull. Kanagawa Prefect. Mus. (Nat. Sci.)*, (48): 37–42.]

世界最重量硬骨魚であるウシマンボウは、マンボウと混同されてきた長い歴史を持つ。神奈川県立生命の星・地球博物館で保管されていたマンボウ属魚類の標本の中にもウシマンボウが1標本混在していたことが新たに判明した。本標本は1977年10月28日に神奈川県の実鶴町沖(35°10'N, 139°08'E)の定置網によって漁獲され、江の島水族館を経由して、現在は剥製標本として本館で展示されている。本標本はウシマンボウにおける国内5例目の全身標本であり、神奈川県2例目の記録でもある。本標本の同定を困難にしていた要因は「剥製化による変形」と「舵鰭の形態異常」と示唆された。

(受付 2018 年 10 月 31 日; 受理 2018 年 11 月 18 日)